「コンテナ物語
～世界を変えたのは『箱』の発明だった～」



著者：マルク・レビンソン
訳者：村井章子
出版：日経ＢＰ社
発行：2007年1月22日

大型の船の上に搭載された色とりどりの直方体、トレーラーがけん引する荷台に搭載された直方体をみなさんもご覧になったことがあると思う。この直方体、すなわち「コンテナ」はいまではありふれたものであり、あらためて考えることはない方も多いのではないだろうか。しかしながら、このコンテナという箱の発明（正確にはコンテナとそれを使った総合的輸送システムの開発）が、その登場以前と比べると、多くの変化をもたらしたと本書は説明する。

この本では14章にわたってコンテナが登場し主役になるまでの過程と、その過程でもたらされた影響を具体的なエピソードで説明していく。すべての章が読み応えがあり、また資料に基づく説明に感銘を受けるが、そのなかでも評者は特に第５章「ニューヨーク対ニュージャージー」をおすすめしたい。ニューヨークとニュージャージーという隣接する州にあった２つの港において、一方は発展し、他方は衰退していく。そればかりかその影響が港湾労働者の雇用減少や製造業の移出など地元経済にまで及んでいく。コンテナ輸送はその発端ではないが、その盛衰を促進する役割を担うのである。港の魅力を高める取り組みを怠る、あるいは変化を見過ごしてしまうと、利用者から見放されてしまうという現代にもみられる港湾間の競争をここでもみることができる。

また全編を通して、このコンテナを使った輸送システムが一人の起業家の構想と熱意から生み出されたことが述べられている。起業の歴史をたどっていくなかで、新規ビジネスを生み出しそれを成功につなげようとする熱い思いと工夫を感じることもできる点で、起業教育に取り組まれるみなさんにはぜひおすすめしたい本である。

大阪商業大学　経済学部　経済学科　専任講師
起業教育委員会　委員　柴田　孝